

遠藤周作

反逆

上



反逆

上

遠藤周作

反逆(上)

一九八九年七月一七日 第一刷発行

著者——遠藤周作

© Syusaku Endo 1989, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三三 郵便番号二三 電話東京〇三九四二二

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——大口製本印刷株式会社

定価——一二五〇円（本体一二二四円）

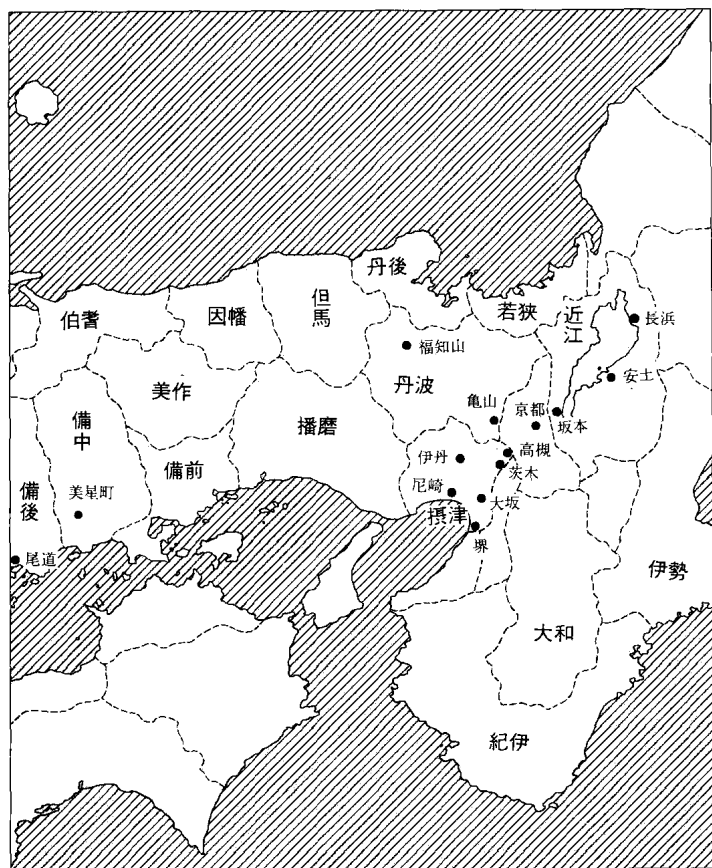
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛に願います。

ISBN4-06-203931-1 (文1)

目次

「裏切り」	7
主人を選ぶ	9
寄らば大樹か	19
男の嫉妬	40
かなわぬ恋	57
はじめての動揺	70
予感	86
あれか、これか	101
男の意地とは	115

内部の崩壊	289
袋小路	274
小笹丸城	253
昨日の友は今日の敵	235
裏切り	207
反逆	187
窮鼠の心境	170
讒言のなかで	151
俗世の試鍊	130



反
逆
(上)

装幀 永原康史

「裏切り」

主人を選ぶ

御存知か。

この日本に最初に黒人が来たのはいつかを。

それは天正九年（一五八一）の二月のことで、九州から南蛮宣教師の一行が春の京都にのぼってきた折である。

一行のなかに黒人の召使がまじっていた。宣教師の一人が印度のゴアから連れてきたのである。折も折、京都の本能寺に織田信長が宿泊していた。

新しいもの、珍しいものに好奇心の強い信長は都で大評判の黒人の話を耳にすると

「呼べ」

と彼独得の高い声で命じた。

信長の声は高く、ひと声で家臣たちは、蜘蛛の子の散るよう四方に駆けだしたと言われている。命令が宣教師たちの宿舎に伝えられると、日本人たちから宇留岸さまとよばれていた伊太利人宣教師があわてて黒人を伴い本能寺に伺候した。

合理主義者の信長は人間の皮膚が漆黒に光っていることがどうしても信じられなかった。

「洗え」

これもひと言。彼はこの男の上半身を裸にして小姓に洗わせた。その皮膚は墨で染めたのだと考えたのであろう。

小姓たちは懸命に黒人の体を洗いこすった。だがその黒色の下から白い皮膚はあらわれなかった。

黒人は少し日本語ができたので、信長は彼に何処の生れで、何故、日本に來たのかをたずねた。そして

「信忠たちにも見せる」

と言ひ、京の妙覚寺に宿泊している長男、信忠たちや、大坂から上洛した甥の信澄までよんだ。

「なぜ、このように黒いのか」

と彼は宣教師の長であるヴァリニヤーノ神父が謁見した時、ふしぎそうに訊ねた。

「この者の生れました国の陽ざしが強いからでございます」

とヴァリニヤーノは畏かしこまつてこたえた。

この時、宣教師は砂時計や壺入つぼいりの砂糖菓子や蜂蜜はちみつ、ボルトガルの帽子などを信長に献上している。

だから信長は当時の日本人のなかでは最初に砂糖菓子や蜂蜜の甘さを味わった一人だったかもしれない。

ところでもう一つの質問。

日本ではじめて眼鏡をかけた人間があらわれたのは西暦何年か。

それは黒人を我々の祖先が見た時よりも十年、早かった。

この年の暮、長良川ながらがわのほとり岐阜城下に近隣近在から群集が殺到した。

それは彼等が見たこともない南蛮人が二人、信長の謁見を受けるため姿をあらわしたからである。
(牛のように体が大きゅうてな、鷹のような鋭い鼻をしとる。怪態な声も出す)
噂が噂をよび、更に尾ひれがついて

(南蛮人の一人は目が、四つあるそうじゃ)

ということを言う者さえ出てきた。

以上のことは宣教師が手紙で報告している。

もつとも日本人たちが目の四つある南蛮人が来たと思ったのは、無理からぬ理由がある。

それは信長の謁見を受けにきた二人の宣教師のうち、カブラルという神父が眼鏡をかけていたからだ。戦国時代の我々の祖先たちは——京都の住民でさえ滅多に眼鏡をかけた者を見たことがなかったから美濃の人間が四つ目が来た、と錯覚したのであらう。

岐阜はもと井之口とよび斎藤道三の孫、竜興の城下町だったが、信長が永禄十年（一五六七）これを奪って名を岐阜と改め、長良川を俯瞰する稲葉山の旧城を壮大華麗に改築して新城をきずいた。岐阜という名は古代中国の周王朝の祖が岐山県によって天下を平定した故事からとった。

かがやくような信長の勢威でその城下町もたちまちにして殷賑をきわめた。

宣教師たちが泊った宿舎は朝から見物人たちが押しかけて周りを囲んでいる。

その見物人を目あてに柿を庭に並べたり、餅を売る者さえ出て

「まあ、すぐには出てはこぬじゃろ。ゆっくりと餅など食いながら待ちなされ」

と餅売りの男が周りの者たちに声をかけている。

「ほんまに四つ目か」

と餅を食いながらたずねる者には

「それは、見てのお楽しみじゃ」

と勿体ぶった答えをする。

やがて宿屋の板戸があいた。

おう、というような声が見物人のあいだに波のように拡がった。

だが、その直後、群集はひとしく口をあけ拍子ぬけをした顔になった。

立てつけの悪い戸から姿を見せたのは、皆が待ちに待った目の四つもある南蛮人ではなかった。片目の男が——それも日本人で——照れくさそうに出てきたのである。

あとでわかったのだが、男は南蛮宣教師の通訳と秘書とをかねたロレンソという日本人修道士だった。

彼は見物人たちをみまわすと

「路をおあげくだされ。路をおあげくだされ」

と哀願するように頼んだ。

だがその必要はなかった。

供まわりと駕籠とを伴った信長の若い家臣が出迎えにあらわれたからである。

「お迎えに参上つかまつった。万見重元と申す」

若い侍は馬からおりロレンソに丁寧に挨拶をした。それは主人の信長から

「異国の高僧たちを貴人をもてなすごとく迎えよ」

と厳命を受けていたからである。

やがて二人の南蛮宣教師たちが現われそれぞれ駕籠にのった。

見物人たちは出迎えの列が城にむかって去っていくと、何やら騙されたような顔をしてそれぞれに引きあげていった。冬のつむじ風が埃をまきあげた。

「たいした勢威だな」

と旅僧が焼餅やきもちを売る男に話しかけた。

「うむ」

さっきとは違つて餅売りの男はきびしい顔で

「南蛮の僧までが、わざわざ信長に挨拶に参る。この勢いではあるいは、天下人になるは武田信玄にもあらず、上杉謙信にもあらず、やはり織田信長やもしれぬ」

と同意した。

「おぬしも、そう思うか」

「思うた。信長が畿内を切りとるのも、そう遠くではない。このこと早うお屋形やかたにお伝えしてくれぬか」

「だが、その信長を、どのような人物とみる」

「酷薄こはくそのものだな」

と餅売りは吐きだすように言った。

「あの男に仕えるのはまことに辛かるう。機嫌を損ねれば、その身はおろか一族郎党ことごとく仕置に会うという。家臣を扱うに仁をもつてせず、怖れをもつて服従させると聞く。この点もくれぐれも話してくれ」

「藤藏はまだこの城下に留まるか」

「そうする。今少し信長の動きや様子をみて茨木に戻ろう」

餅売りは稲葉山の信長の城にチラと眼をやった。

餅売りの男も旅僧も実は摂津せつの国、茨木の城主、荒木村重あらきむらしげという男の手の者だった。

城主といっても村重は、たとえば信長や武田信玄などとは比較にもならぬ畿内にひしめきあう小豪族の一人にすぎぬ。

彼は最近、摂津の国内では頭角を現わした。現在の池田市附近を領していた池田一族の内紛に乗じて、つい、この八月、従兄弟で小豪の一人中川清秀と結び、和田惟政や茨木重朝の連合軍を破って茨木城を乗とったばかりである。

もつとも――

頭角を現わしたといっても高が知れていた。周りの城主たちはいつ、彼を襲ってくるやもしれぬ。今日は味方でも明日は敵となるかもしれぬ。

だから村重としては、やがてこの畿内を征服する大きな勢力の庇護を受ける必要があった。この大勢力の幕下に入って本領を安堵され、出世していくのが当時は一番、手がない方法だったからである。

だが都をわがものにし、畿内を本当に征服できるのは誰か。

小豪たちはそれを察知しようとして必死である。

「誰もが織田信長だ信長だと申しているが……」

荒木村重は家来からの意見を聞いたのち首をかしげ

「將軍を奉じて都に入つたものの、いつまでもその勢いを保てるとは申せまい。その証拠には去年より一向宗の門徒と石山寺で戦うて、いまだに手こずっておる。毛利のあと押しがあるからで、戦いが長引けばあるいは背後から武田信玄などに襲われるかもしれぬ」

村重が首をかしげるのはもつともだった。

十一年前、寡兵よく今川義元の大軍を奇襲してその首を討ちとつて以来、信長の動きはまさに疾風のようである。將軍の足利義昭を奉じて都にのぼつたかと思うと、朝倉義景や浅井長政の連合軍を姉川に破り、彼に反抗した比叡山を焼うちにして火の山をつくり、あまりにすさまじい。

だが、そのすさまじさが逆に氣にかかるのだ。なぜかわからぬが、不吉なものを感じさせる。一